

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和2年度病害虫発生予察情報について

このことについて、発生予報第12号（3月）を発表したので送付します。

鹿児島県病害虫防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

☎099-245-1081（代表）

099-245-1157（直通）

099-245-1149（FAX）

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jppn.ne.jp/kagoshima>



メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

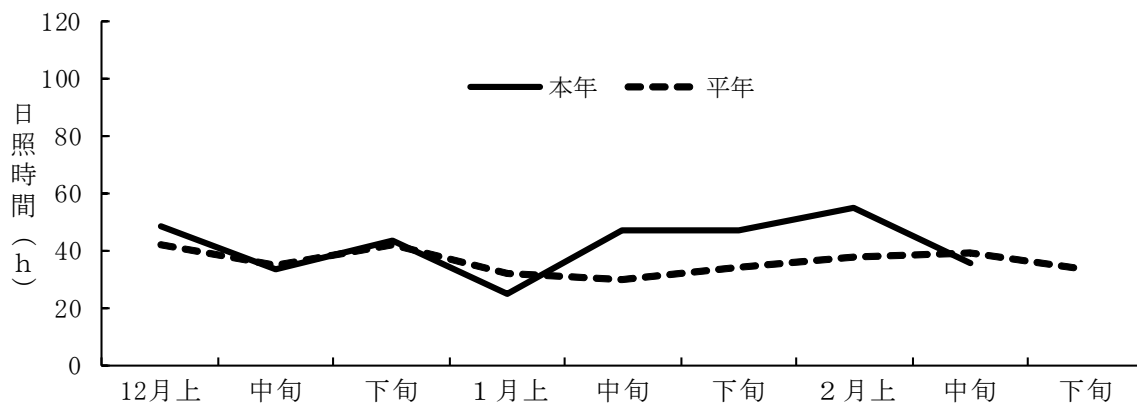
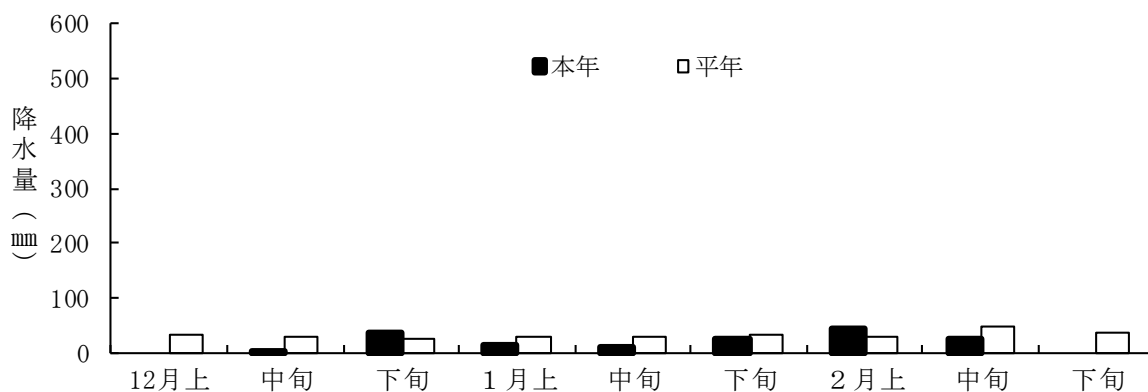
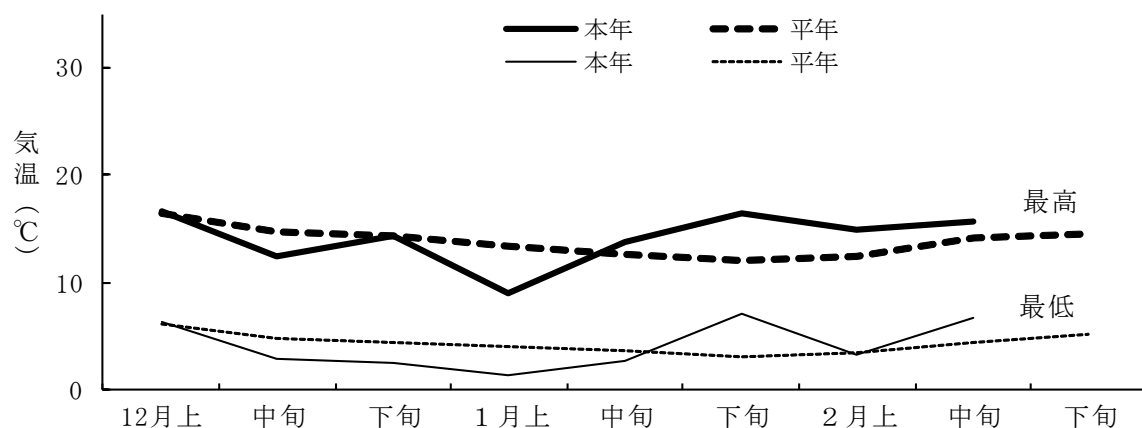
農薬ラベルを確認しましょう。
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。

【気 象 概 況】

I. 向こう1か月の予報（2月27日から3月26日） 令和3年2月25日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	20	70	九州南部では、気温は高く、降水量は平年並みか多く、日照時間は少ない見込み。奄美地方では、気温は高く、降水量は少なく、日照時間は多い見込み。
	奄美地方	10	30	60	
降水量	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	50	30	20	
日照時間	九州南部	50	30	20	
	奄美地方	20	30	50	

II. 12～2月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
野 菜	キュウリ	べと病	多	多
		退緑黄化病	多	多
		黄化えそ病	並	並
	ピーマン	斑点病	並	並
		うどんこ病	並	並
		アザミウマ類	やや少	並
	イチゴ	アザミウマ類	多	多
		ハダニ類	やや少	並
	施設野菜共通	灰色かび病	並	並
	キャベツ	菌核病	並	並
	エンドウ類	うどんこ病	多	多
		ハモグリバエ類	やや多	やや多
アザミウマ類		やや多	やや多	
バレイショ	疫病（県本土）	並	並	
	”（熊毛地域）	やや多	多	
	”（奄美地域）	多	多	
花 き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	やや多	多
		アザミウマ類（県本土，施設）	やや多	多
茶 樹	チャ	カンザワハダニ	並	やや多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 野 菜

1. キュウリ

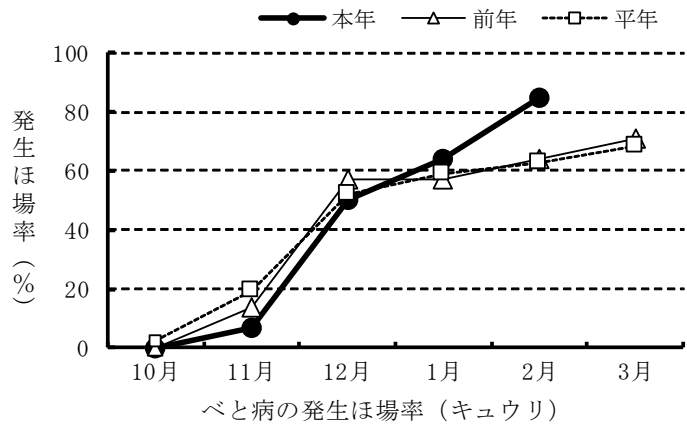
(1) ベと病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率85%（平年63%）
：高い（+）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウスの通風換気に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、伝染源となるためハウス外に持ち出して処分する。
- (ウ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

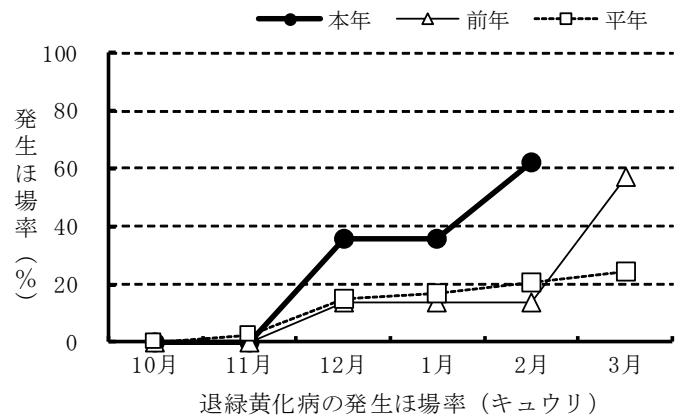
(2) 退緑黄化病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率62%（平年21%）
：高い（+）



コナジラミ類の

発生ほ場率46%（平年42%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 退緑黄化病の病原ウイルスはタバココナジラミに媒介される。ハウス開口部（サイド等）等に黄色粘着トラップを設置し、タバココナジラミの早期発見，早期防除に努める。
- (イ) 発病株を認めたら速やかに除去し、ビニール袋等に入れて適正に処分する。
- (ウ) 発病後は発生拡大を防ぐため、タバココナジラミの密度を抑えるように薬剤防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(3) 黄化えそ病

ア 予報内容

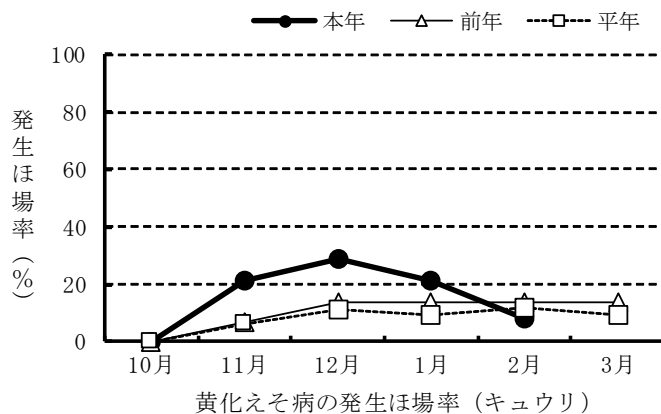
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率8%（平年12%）：並
アザミウマ類の
発生ほ場率15%（平年19%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 黄化えそ病の病原ウイルスはミナミキイロアザミウマに媒介される。ハウス開口部（サイド等）等に青色粘着トラップを設置し、ミナミキイロアザミウマの早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 発病株を認めたら速やかに除去し、ハウス外に持ち出して埋没処分するか、ビニール袋等に入れて処分する。
- (ウ) 発病後は発生拡大を防ぐため、ミナミキイロアザミウマの密度を抑えるように薬剤防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

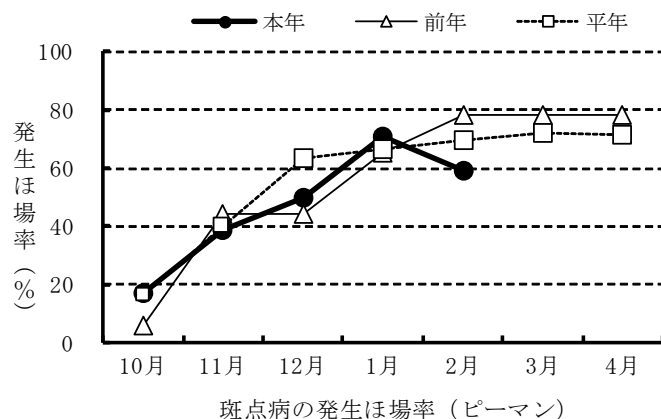
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率59%（平年69%）
：やや低い（－）
発生程度の高いほ場を認めた（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



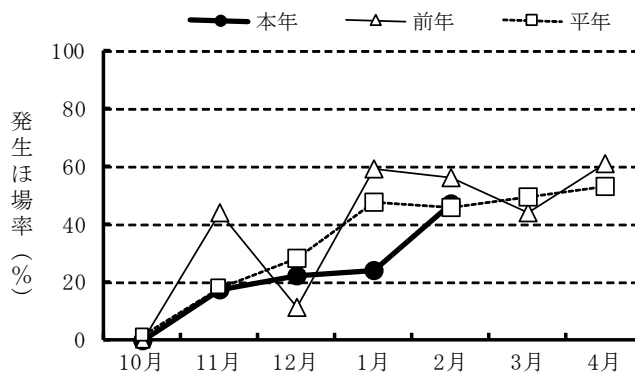
(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率47%（平年45%）：並



うどんこ病の発生ほ場率 (ピーマン)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れ等による草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

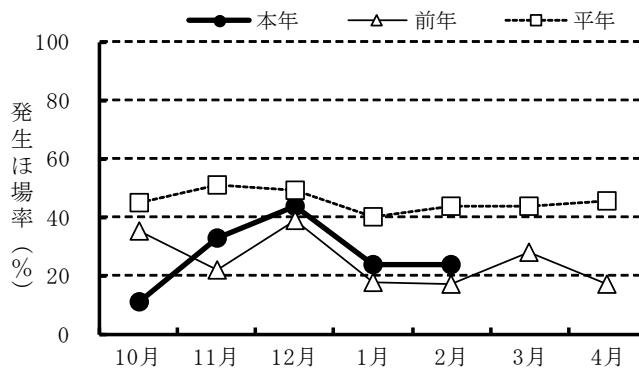
(3) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率24%（平年44%）
：やや低い（-）



アザミウマ類の発生ほ場率 (ピーマン)

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの開口部（出入り口やサイド付近）等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 花や新芽の中など、薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (ウ) 天敵を利用しているほ場では放飼後、チャノホコリダニやアブラムシ類の発生に注意し、発生時にはスポット散布など早めの対策を講じる。なお、防除を行う場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

3. イチゴ

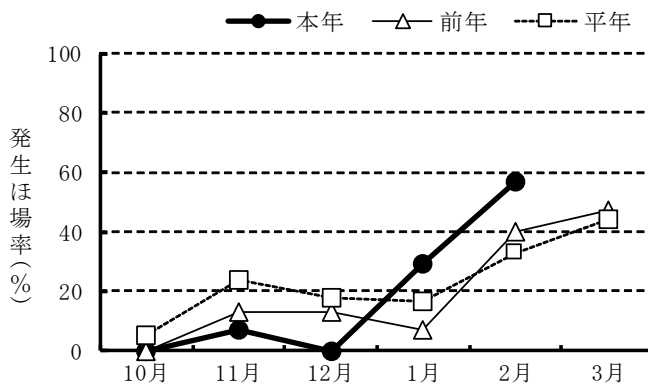
(1) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率57%（平年32%）
：高い（+）



アザミウマ類の発生ほ場率 (イチゴ)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 主な発生種はヒラズハナアザミウマである。

(イ) ハウス周辺及び内部の雑草は発生源になるので除草する。

(ウ) 出入り口やサイドなどのハウス開口部から侵入することが多いので、防虫ネットを展張するとともに、青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。

(エ) 本虫は花の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(カ) カブリダニ類等の天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。

(キ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。

(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作型 促成栽培

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率50% (平年67%)

: やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

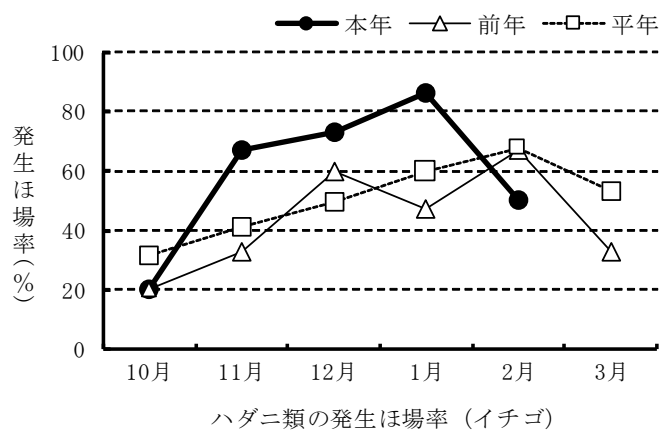
(イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(オ) カブリダニ等の天敵を放飼した場合は、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。

(カ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。



4. 施設野菜共通

(1) 灰色かび病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 対象作物 キュウリ, トマト,
 ミニトマト, ピーマン,
 イチゴ, サヤインゲン

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

作物名	発生ほ場率 (%)		発生量
	本年	平年	
キュウリ	8	17	やや少
トマト	54	38	やや多
イチゴ	29	26	並

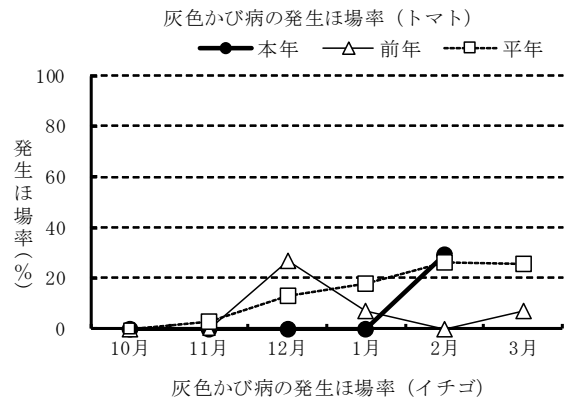
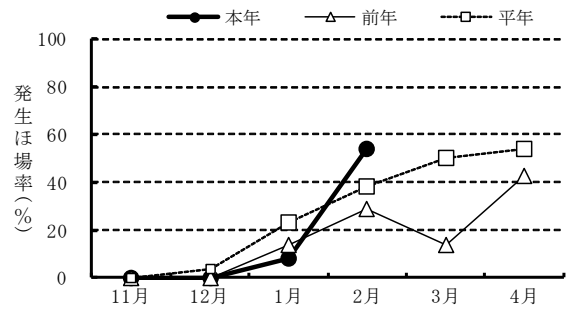
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。

(イ) 果実部やへたの付近に付着する花卉は本病の発生源となるので、こまめに除去する。

(ウ) 発病葉や発病果実はビニール袋等に入れてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



5. キャベツ

(1) 菌核病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
 (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並
 発生ほ場率17% (平年25%)：並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

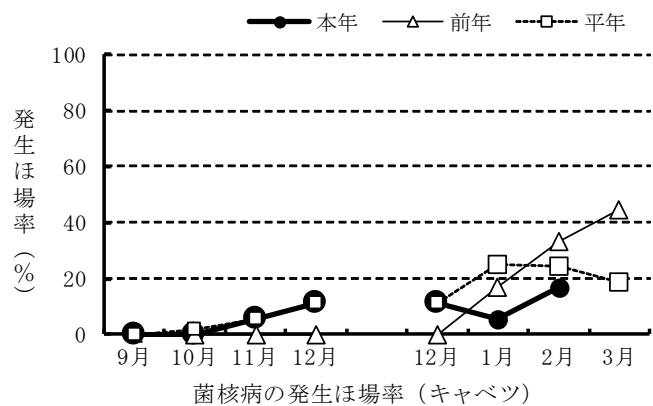
(ア) 多湿条件で発生しやすいので、天候に注意し、予防散布に努める。

(イ) 病原菌は地際部から感染しやすいので、薬剤は株元へ十分かかるように散布する。

(ウ) 発病部位から健全部へ菌糸によって被害が広がるので、発病葉は見つけ次第取り除く。

(エ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し処分する。

(オ) 収穫終了後の残渣は適正に処分する。特に発病残渣をほ場に残さない。



6. エンドウ類

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率40%（平年16%）
：高い(+)

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

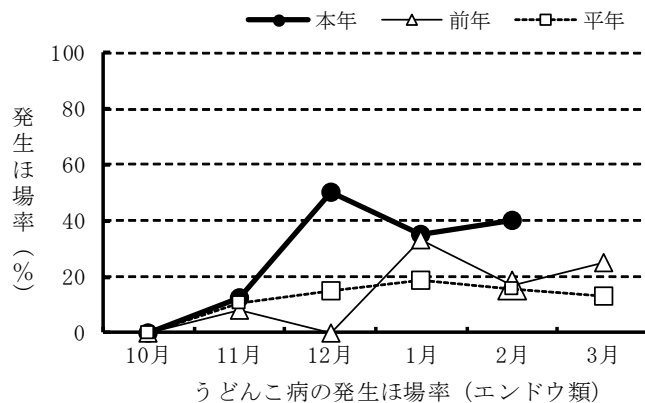
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 莢にごま症を発生させ、商品性の低下につながる。多発すると防除が困難になるので、定期的な防除を行う。

(イ) 下位葉の葉裏から発生しやすいので、薬剤が十分かかるように散布する。

(ウ) 多発ほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。



(2) ハモグリバエ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率60%（平年44%）
：やや高い(+)

(イ) 気象予報

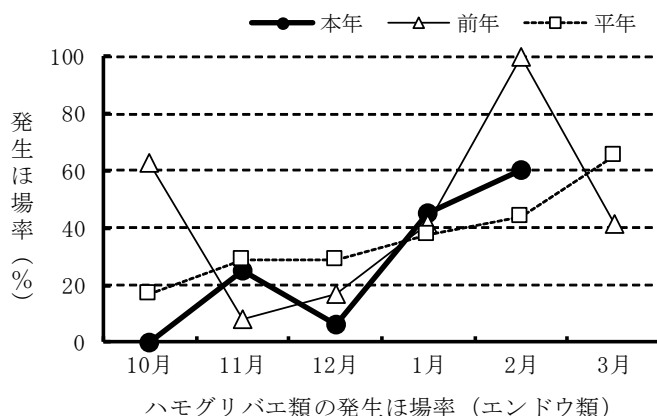
気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 主に葉裏側に潜行するナモグリバエが多く認められている。葉裏をよく観察し、早期発見に努める。

(イ) ほ場内密度を上げないよう防除に努める。薬液は葉裏にも十分かかるよう留意し、多発ほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

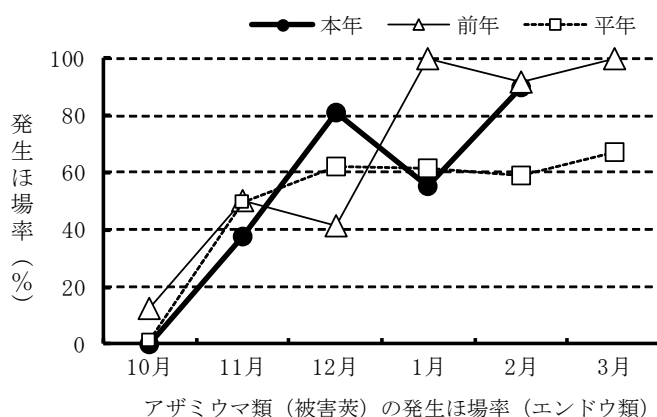
(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率90%（平年59%）
：やや高い(+)

(イ) 気象予報

気温：高い(+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類は若莢に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、早期防除に努める。
- (イ) 薬剤のかかりにくい花卉の奥や若莢に寄生するので、丁寧な薬剤散布に努める。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

7. バレイシヨ

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 対象作型 春作
- (ウ) 発生量 県本土：並
熊毛地域：多
奄美地域：多

イ 予報の根拠

<県本土>

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率0%（平年3%）：並

- (イ) 気象予報
気温：高い（+）

<熊毛地域>

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率67%（平年20%）

- ：高い（+）
発生程度は低い（-）

- (イ) 気象予報
気温：高い（+）

<奄美地域>

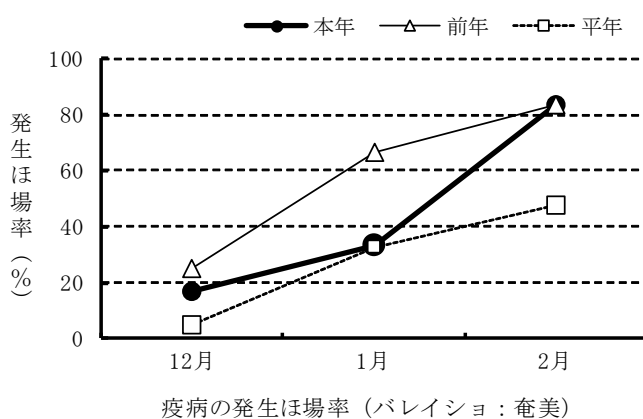
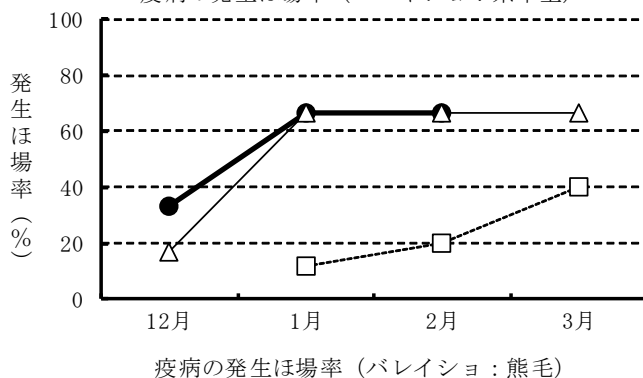
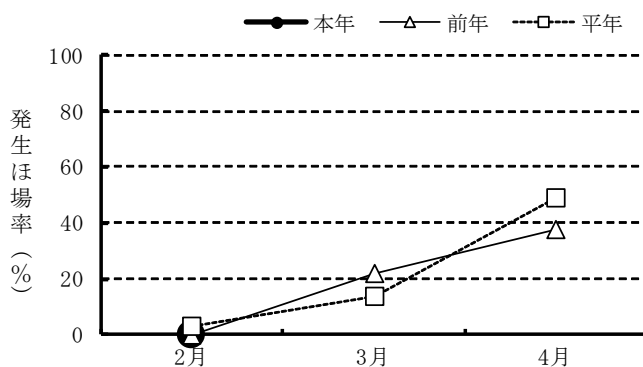
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率83%（平年48%）

- ：高い（+）

- (イ) 気象予報
気温：高い（+）
降水量：少ない（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 降雨が数日続いた場合や、土壤水分が高い場合に発生しやすく、発病後は急速に病勢が進展するので、防除は予防散布に重点をおき、適期を逃さないように注意する。
- (イ) ほ場の見回りをを行い、発生が認められたら直ちに防除を行う。その後は、進展状況に応じて7～10日後に追加散布を行う。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (エ) 収穫が遅れると被害拡大につながるため、適期収穫を行う。
- (オ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適正に処分する。
- (カ) 薬剤防除にあたっては令和元年度技術情報第5号(令和2年1月29日付け；ホームページ掲載)を参照。



.....
防除に関する今月の留意事項

1. アブラナ科野菜収穫後の耕種的病害対策（菌核病、根こぶ病）

アブラナ科野菜収穫後は、次作の病害発生を抑えるため、以下の点を考慮した総合的な防除対策に努める。

○菌核病対策

- (1) 菌核病の発生の少ないほ場は、菌核をほ場に落とさないよう菌核病株を抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分する。畦畔を含むほ場への発病株放置は次年度の多発原因となるため、ほ場に発病株を放置しない。
- (2) 菌核病の発生の多いほ場では、天地返しを行い発病株を土中深く埋没し、次作にアブラナ科野菜、レタス等を栽培せず、輪作を行う。

○根こぶ病対策

- (1) 根こぶ病はトラクター等の作業機がほ場に入出入りする出入口付近で多く見られるので、出入口付近の株を引き抜き、こぶ状のものがあるか否かを目視で確認する。
- (2) 根にこぶ状のものが付着してしている場合は、根こぶ病の発生が考えられるので、最寄りの地域振興局・各支庁の農政普及課もしくは病害虫防除所に連絡する。
- (3) 根こぶ病の発生ほ場では、作業機械等による汚染土壌の持ち出しを防ぐため、作業機械に付着した土を丁寧に洗浄する。また、発生ほ場の管理を最後にする等、被害を拡散させないように注意する。

2. 熊毛地域・奄美地域のバレイショの収穫後の耕種的病害対策

熊毛地域・奄美地域では、今作で疫病や軟腐病、菌核病の発生がみられている。収穫残さが次作の一次伝染源となるので、収穫後は以下のほ場管理を適切に行う。

- (1) 収穫後の発病茎葉・いもやくずいも等は、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) 疫病、菌核病の発生が多く、ほ場外へ残渣の持ち出しが困難なほ場では、天地返しにより残渣を土中深く埋没し、次作にサトウキビ、イネ科牧草等の輪作を行う。

3. その他野菜等の残渣処理について

露地野菜等の残渣は、菌核病や軟腐病をはじめ、次作に対して様々な病害虫の伝染源（発生源）となるので、長期間放置してほ場の病原菌密度や虫数を増加させないように、収穫終了後はできるだけ速やかに残渣処理を行う。

- (1) 発病茎葉・果実を含め、収穫後の残渣は、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- (2) ほ場外への残渣持ち出しが困難なほ場では、複数回の耕耘により残渣を早めにすき込み分解を促す。

Ⅱ. 花き（キク）

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率40%（平年21%）
：高い（+）

発生程度は低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

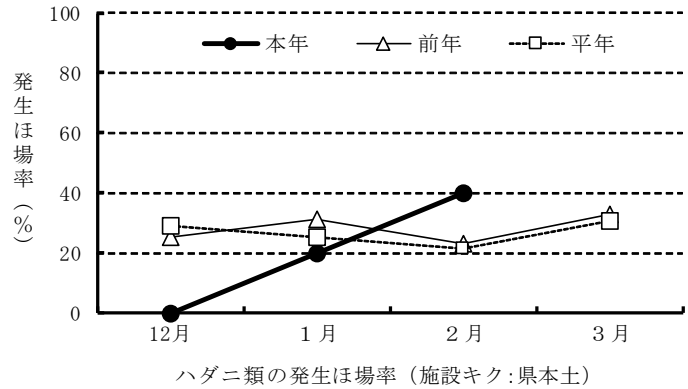
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように十分量を散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率30%（平年14%）
：高い（+）

発生程度は低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見および初期防除に努める。

(イ) 母株や苗の導入に際しては、アザミウマ類の寄生やウイルス感染に細心の注意を払う。

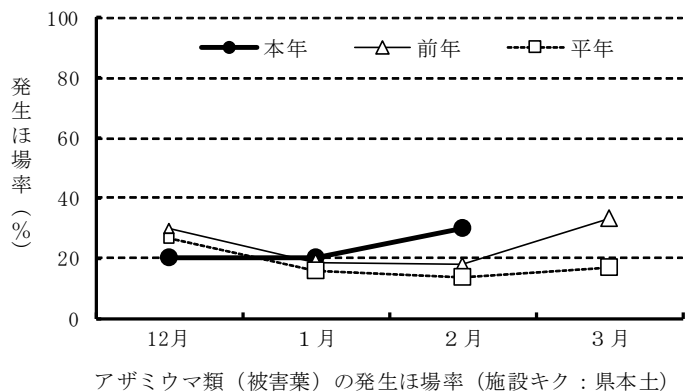
(ウ) 施設では開口部に目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(エ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(カ) クログハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(キ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



Ⅲ. 果 樹

防除に関する今月の留意事項

1. 高温による果樹への影響と病害虫対策

1月下旬以降気温が高く、気象庁の1か月予報では今後も気温が高いと予報されているため、発芽が早まることが予想される。さらに、病害虫の発生も早くなることが予想されるので、生育状況をこまめに観察し、防除適期を逸さないよう注意する。

2. カンキツかいよう病

かいよう病の越冬病斑が一部ほ場で認められる。越冬病斑が多いと、春葉での発生が増加するので、防除対策に努める。

(1) せん定時に罹病枝をせん除し、第一次伝染源をできるだけ少なくする。

(2) 葉及び果実を傷つけないために、防風林、防風樹を整備する。

(3) 病原菌の菌密度が高くなると薬剤の効果が上がりにくくなるので、発芽前防除に重点を置き、春先の菌密度を抑えることが重要である。

Ⅳ. 茶 樹

(1) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率41%（平年 37%）：並

寄生葉率 1.7%（平年3.4%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

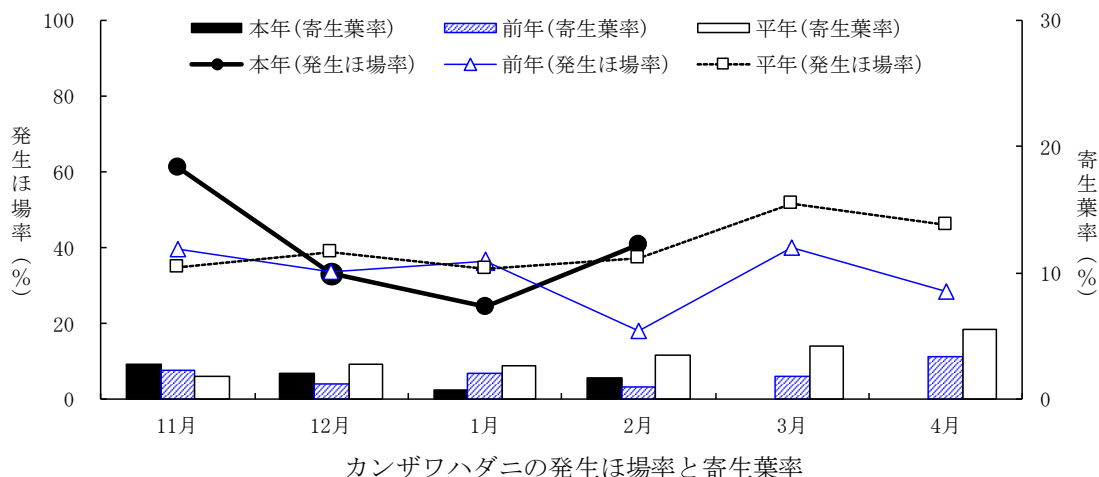
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 平均気温が10℃を超えると産卵・増殖が盛んとなり、寄生密度が急増するので、発生状況を把握し防除を行う。

(イ) 春の基幹防除後も発生が多い場合は、一番茶の被害を避けるため萌芽前に防除を行う。

(ウ) 薬剤は、裾部・葉裏に十分かかるように留意する。

(エ) 例年、サビダニ類の発生が多いほ場では、カンザワハダニとサビダニ類の両方に効果の高い薬剤を選択する。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+），（-）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。